

## 戦後日本の文学空間における「アメリカ」：占領から文化冷戦の時代へ

その他のタイトル	"America" in the Post-war Literary Scene in Japan : From the Period of American Occupation to the Age of the Cultural Cold War
著者	金 志映
学位授与年月日	2016-03-07
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00073194">http://doi.org/10.15083/00073194</a>

東京大学大学院総合文化研究科課程博士論文

## 博士論文（要約）

論文題目：

戦後日本の文学空間における「アメリカ」  
— 占領から文化冷戦の時代へ —

“America” in the Post-war Literary Scene in Japan:  
From the Period of American Occupation to the Age of the Cultural Cold War

氏名：金 志映

## 【本編目次】

序章	1頁
第一節 研究の背景及び問題設定	1頁
第二節 先行研究の整理及び研究の意義	5頁
(一) 歴史・文化研究分野における先行研究	5頁
(二) 戦後文学における「アメリカ」の先行研究	6頁
(三) 比較文学研究における先行研究	8頁
(四) ロックフェラー財団創作フェローシップに関する先行研究	9頁
(五) 本博士論文の位置づけと意義	10頁
第三節 論文の内容及び構成	13頁
<b>第一部 占領期のGHQ文化政策と「アメリカ」の表象</b>	
第一章 占領期の文化／文学が創出される場	15頁
第一節 「文化国家」としての再出発——被占領体験の土壌	15頁
第二節 GHQの対日文化政策	24頁
(一) 占領初期における民主化と非軍事化 ——民間情報教育局（CIE）の情報・教育政策	25頁
(二) 視聴覚／活字メディアによるアメリカ文化の伝播 ——冷戦浮上のなかで	31頁
(三) 人物交流プログラム	44頁
第三節 民間検閲局（CCD）検閲と占領下の言説空間	54頁
第二章 戦争と占領の表現における「アメリカ」	64頁
はじめに	64頁
第一節 占領期表象としての大岡昇平『俘虜記』	66頁
(一) 占領下日本のアレゴリーとしての『俘虜記』	67頁
(二) 占領期の言説空間と『俘虜記』	69頁
(1) 同時代の「戦争の語り」の動向	69頁
(2) GHQの検閲と『俘虜記』	71頁
(三) 同時代批評の試みとしての『俘虜記』	77頁
第二節 阿川弘之の初期作品における原爆の主題と「アメリカ」	81頁
(一) 占領下の原爆文学——被爆と被占領の二重の痕跡	83頁
(二) 阿川の初期作品「年年歳歳」「霊三題」「八月六日」とGHQ検閲	85頁
(三) 『魔の遺産』（一九五三）にみる原爆の表現とアメリカ	89頁

(1) 原爆投下国アメリカへの視線-----	89頁
(2) 原爆の記憶から豊かな戦後へ-----	96頁
<b>第三節 被占領体験の語りにおける「アメリカ」</b>	
——小島信夫「アメリカン・スクール」を中心に-----	<b>101頁</b>
(一) 占領の歴史に見る教育とアメリカン・スクール-----	103頁
(二) 小説「アメリカン・スクール」に描かれた占領-----	107頁
(1) 集団体験としての恥辱-----	108頁
(2) 被占領者の群像-----	112頁
(a) 戦後体制への齟齬と被占領体験の痛み-----	113頁
(b) 戦前の価値との連続性-----	117頁
(c) 女性たちの戦後-----	119頁
(三) 占領の記憶の物語化とナショナル・アイデンティティの再定立-----	124頁
<b>第二部 ポスト講和期の日米文化交流と「アメリカ」の表象</b>	
<b>第三章 ポスト占領期の日米文化関係——文化冷戦の時代-----</b>	<b>129頁</b>
はじめに-----	129頁
<b>第一節 占領からポスト占領期へ——対日文化政策の連続と非連続-----</b>	<b>133頁</b>
<b>第二節 日米文化関係の計画——ジョン・D・ロックフェラー三世の報告書-----</b>	<b>145頁</b>
(一) 交流の目的と原則-----	145頁
(二) 文化交流プログラム (Cultural interchange) -----	149頁
(三) 情報交流プログラム (Interchange of information) -----	155頁
(四) ロックフェラー報告書への評価-----	159頁
<b>第三節 ポスト占領期におけるアメリカの対日文化活動の様相-----</b>	<b>163頁</b>
<b>第四節 異文化の交流とナショナル・アイデンティティの相関関係-----</b>	<b>177頁</b>
<b>第四章 日米文化交流と文学場</b>	
——ロックフェラー財団文学者留学制度を中心に-----	<b>185頁</b>
はじめに-----	185頁
<b>第一節 講和以後の日米人物交流と文学空間-----</b>	<b>187頁</b>
<b>第二節 ロックフェラー財団創作フェローシップ</b>	
<b>(Rockefeller Foundation Creative Fellowship) プログラムの実態-----</b>	<b>192頁</b>
(一) プログラムの計画と運営をめぐる日米の協力-----	195頁
(二) フェローの人選-----	196頁
(三) 留学に対する支援方針-----	201頁
<b>第三節 ロックフェラー財団研究員の意味-----</b>	<b>205頁</b>

(一) ロックフェラー財団創作フェローシップ計画の背景——アメリカ側の視点-----	206頁
(二) 日本側の視点-----	223頁
<b>第四節 創作フェローらの留学の実相-----</b>	<b>230頁</b>
(一) フェローらの留学の概要-----	230頁
(二) 異文化体験を形作る諸要素——財団の方針と照らし合わせて-----	236頁
(三) 留学を通して体験された冷戦の磁場-----	245頁
<b>第三部 ロックフェラー財団フェローの描いた「アメリカ」</b>	
はじめに——冷戦が創出した「アメリカ」の表象空間-----	254頁
<b>第五章 阿川弘之『カリフォルニア』における「アメリカ」</b>	
——文化冷戦下のエスニシティの表象として-----	<b>259頁</b>
<b>第一節 原爆投下国アメリカへの留学と日系人への主題転換-----</b>	<b>259頁</b>
(一) 原爆の主題の喪失-----	259頁
(二) 留学の体験と新しい主題-----	261頁
<b>第二節 小説『カリフォルニア』における日系人の表象をめぐって-----</b>	<b>273頁</b>
(一) テクストの成立-----	273頁
(二) 歴史の語り部としての日系アメリカ人-----	276頁
(三) 田澤報告書のナラティブ-----	285頁
<b>第三節 小説『カリフォルニア』におけるエスニシティ表象の政治性</b>	
——冷戦下のアメリカ広報宣伝映画との比較を通して-----	<b>291頁</b>
(一) 冷戦下における人種・エスニシティの表象-----	291頁
(二) 日系二世の農場の描写——U S I S映画との比較において-----	294頁
(三) 異人種間の結婚のモチーフ-----	299頁
<b>第六章 小島信夫の描いた同時代の「アメリカ」</b>	
——『異郷の道化師』にみる人種・言語・生活様式-----	<b>303頁</b>
<b>第一節 小島信夫の留学-----</b>	<b>303頁</b>
<b>第二節 異なる〈陸地〉の体験と他者意識-----</b>	<b>314頁</b>
<b>第三節 作品集『異郷の道化師』に描かれる「アメリカ」-----</b>	<b>318頁</b>
(一) 日米交流に伴う〈恥ずかしさ〉——「異郷の道化師」を視座として-----	321頁
(二) 文化的な他者として意識される「アメリカ」	
——小説「広い夏」における異言語体験を中心に-----	331頁
(三) アメリカン・ライフへのまなざし	
——「異郷の道化師」「広い夏」「小さな狼藉者」に見る生活様式と家庭生活-----	339頁
(1) アメリカ的生活様式と戦後日本——作品の同時代的背景として-----	339頁
(2) 「異郷の道化師」の描くアーミッシュ・メノナイト農家-----	344頁

(3) 「広い夏」——「反近代」の生活様式と近代化する農村-----	348頁
(4) 「小さな狼藉者」に見るアメリカ家庭像-----	355頁
<b>第七章 ナショナル・ヒストリーから個の語りへ</b>	
——有吉佐和子『非色』における〈戦争花嫁〉の「アメリカ」-----	<b>359頁</b>
<b>第一節 有吉佐和子の留学——内容とその作品への影響-----</b>	<b>359頁</b>
<b>第二節 留学をめぐるメディア表象——〈才女〉の渡米-----</b>	<b>367頁</b>
<b>第三節 小説『非色』の描く〈戦争花嫁〉の「アメリカ」-----</b>	<b>371頁</b>
(一) 作品の受容をめぐる-----	371頁
(二) 占領の語りとしての『非色』-----	375頁
(1) 国民国家の物語としての占領——女性の占領体験とナショナルな表象-----	375頁
(2) 女性史（ハストリイ）としての占領	
——戦争花嫁、黒人、混血児の視点からの語り直し-----	385頁
(三) 同時代アメリカの表象としての『非色』——人種差別問題への視座-----	399頁
<b>終章 -----</b>	<b>410頁</b>
<b>第一節 ロックフェラー財団創作フェローの「アメリカ」が語るもの-----</b>	<b>410頁</b>
<b>第二節 創作フェローシップがもたらしたもの-----</b>	<b>413頁</b>
(一) 創作フェローの表現の軌跡に即して-----	413頁
(二) 一九五九年中間報告書における坂西志保の評価-----	418頁
<b>第三節 創作フェローのその後-----</b>	<b>424頁</b>
<b>参考文献-----</b>	<b>426頁</b>

(本編：A4版 全460頁)

## 【本文要旨】

米国立公文書館（NARA）の関連文書が急速に公開されるに伴って近年活気を帯びている冷戦史研究は、冷戦期においてアメリカが、国家イメージの向上および親米世論の形成を目的として、さまざまな文化外交や宣伝活動を世界規模で活発に行ったことを明らかにしている。アメリカの戦後対日政策はこうした動きと足並みを揃えており、占領終結時には、GHQの民間情報教育局及び陸軍省から国務省へ、情報・教育政策の引継ぎが行われた。占領の終結は、冷戦の時代の幕開けでもあったのである。このような認識から本論文では、文学の領域における文化冷戦の事例として、ロックフェラー財団（The Rockefeller Foundation）が日本の文学者に対して行った留学支援を取り上げて考察する。アメリカの文化冷戦は、政府諸機関と多くの民間組織の協力によって担われていたが、その一つの代表例とされるロックフェラー財団は、アジア諸国において広く文化事業を展開していた。そして五〇年代を通して民間組織として日米文化交流を先導したロ財団は、多彩な活動の一環として、講和直後の五三年に日本の文学者を対象として一年間の留学を支援する創作フェローシップ（Creative Fellowship）を立ち上げた。およそ十年の間に、福田恆存、大岡昇平、石井桃子、阿川弘之、中村光夫、小島信夫、庄野潤三、有吉佐和子、安岡章太郎、江藤淳といった戦後を代表する文学者たちがこのプログラムの招聘を受けてアメリカへ渡った。ロ財団の文学者留学制度は、冷戦秩序構築の只中にあった占領後期からポスト占領期への移行期に、本土日本におけるアメリカの対日政策の重心が軍事から経済・文化の領域へと移るなか、文学の領域が、俄かに文化冷戦の場として浮上したことを鮮明に映し出す事例である。

本論文は、このロックフェラー留学を通して文化冷戦の場に身を置いた作家たちの作品を取り上げて考察することにより、占領期から冷戦期にかけての文化領域をめぐる政治的な磁場のなかで、戦後文学における「アメリカ」の表象がどのように形作られていったのかを明らかにすることを目的とする。論文では、主に以下に挙げる三つの相において考察を試みた。第一に、占領期から講和後の文化冷戦期にかけて、アメリカが日本の文化や文学にどのように介入したかである。第二には、アメリカによる

文化攻勢が働くなかで、文学者たちがどのように「アメリカ」を経験し、「アメリカ」への態度を形成していったかである。第三には、「アメリカ」表象史としてみたときに、戦後の文学作品のなかのアメリカ・イメージがどのように表れ、変化したかを明らかにすることである。

占領期に焦点を当てる第一部の第一章では、敗戦後に「文化国家」を新たな国家アイデンティティに据えて再出発した日本において、アメリカが日本の文化／文学の創出にどのように介入したのかを明らかにする。占領政策の一つの特徴は、日本人の再方向付けと民主主義化という占領の目的を円滑に遂行するために、「文化」のもつ力が重視されたことにあった。そのために、民間情報教育局（CIE）による多岐にわたる情報・教育政策が施行された。CIE映画が大量に製作され、メディアを通じた大規模な宣伝活動が活発に行なわれる一方で、留学制度を通して人的交流が行われ、後にフルブライトなど冷戦期の留学制度の前身として機能した。第四節では、GHQの検閲に焦点をあて、敗戦直後から一九四九年十月まで民間検閲局（CCD）によって施行された検閲の特徴とそれが当時の言説に及ぼした影響を考察した。

これに対して第二章においては、占領期から占領直後までの文学作品におけるアメリカの表象に目を向ける。この時期を代表する作品として、後にロックフェラー財団創作フェローとなる大岡昇平、阿川弘之、小島信夫をそれぞれ取り上げて、GHQの検閲の影響にも注意を払いながら、戦争や占領の体験がどのように描かれているのかを考察する。第一節で取り上げる大岡昇平の『俘虜記』は、戦前の俘虜収容所の情景を「監禁状態」にある占領下日本のアレゴリーとして描くことを試みている。同作品は検閲によって一部が削除処分を受けているほか、さらに作者の自主規制の痕跡を確認できる。その一方で大岡は、アレゴリーの手法に依拠して検閲網をくぐりながらアメリカの統制に対する批判を示している。終戦とともに広島に復員した阿川弘之は、「年年歳歳」、「霊三題」、「八月六日」、「春の城」などの初期作品において、原爆を繰り返し作品化した。このうち「年年歳歳」は作品の一部が削除処分を受けている。検閲下で書かれた初期の三作品では「アメリカ」が不在だが、検閲が終結した後に発表された『魔の遺産』で阿川は、原爆を投下した「アメリカ」と正面から対峙している。二人の文学者の事例からは、「アメリカ」をめぐる表現への拘束とこれとの格闘が看取される。第三節では、占領が終結した後に書かれた小島信夫の芥川賞受賞



作「アメリカン・スクール」を取り上げて考察した。同作品で小島は、被占領者に共有された集団的体験としての恥辱を描きながらも、多様な被占領者の群像を通して占領体験を描いた。

続く第二部第三節では、占領からポスト講和期へのアメリカの対日文化政策の移行を辿り、講和以後に活発化した日米文化交流に眼を向ける。講和後も日本を親米的な民主主義国に留めておくことを目論見たアメリカは、この時期に日本において大規模な文化交流計画を始動させ、日米文化関係の強化を図った。第三章においては、講和使節団に文化顧問として随行したロックフェラー三世が講和以後の日米文化関係の構想を纏めた報告書を取り上げてその内容を検討し、その後に政府と民間によって実現した多岐にわたる日米文化交流を概観した。これにより、冷戦下にあったポスト講和期の日米文化交流に内在した政治的な磁場が明らかになった。また、この時代にアメリカは、U S I S映画やラジオ放送などを通してアメリカに関する好ましいイメージを日本に向けて積極的に発信していた。冷戦期のアメリカによる情報・宣伝政策を視点としたときに強く浮び上るのは、自らを表象する「アメリカ」である。

第四章では、文学の領域における文化冷戦に眼を向ける。講和後の日米文化交流には文学者たちも多く身を置いていた。そのなかでも突出して多くの文学者をアメリカへと送り出したのが、ロックフェラー財団創作フェローシップである。本研究では、ロックフェラー財団文書館（The Rockefeller Archive Center）資料に基づいて、これがいかなるプログラムであったのかを実証的に解明した。考察の結果明らかになった点は、以下の通りである。第一には、冷戦下で行われた多くの文化交流事業と共通して、同プログラムには、構想から運営に至るまで、政治的な思惑と相互的な文化交流の理想が複雑に絡みあっていた。第二に、同留学プログラムは日本側の要請をも踏まえて立案されたもので、日米が合同で運営に関わり、坂西志保が推薦人を務めるなど、留学制度をめぐっては日米双方の力が働いていた。さらにこの助成プログラムをめぐると日米双方の期待や思惑を検証するならば、創作フェローシップは、日米の反共リベラルが手を結んで親米反共の路線に基づく日本の近代化推進を目指す企図が、文学への介入として顕われたものと言える。これらの点に加えて、財団側の柔軟な方針により、各々の文学者の留学の体験が多様なものとなったことは、創作フェローシップの重要な特徴である。総じていえば、ロ財団留学制度の成立に冷戦体制の政治的な要請

が強く働いていたことは疑いえないとしても、実際の留学は、冷戦の政治性にのみ収斂しないものとなったといえる。

こうした考察を踏まえて最後に第三部を構成する第五章、第六章、第七章では、阿川弘之、小島信夫、有吉佐和子の三人の創作フェローの留学体験と、帰国後に「アメリカ」を題材として書かれた代表的作品を順に取り上げて考察した。各々の文学者は、各自の関心に基づいて多様なアメリカの体験をし、それをもとに作品のなかでそれぞれに異なる「アメリカ」を描いた。日系人をテーマにした阿川弘之の『カリフォルニヤ』、中西部での農家滞在の体験をもとにアメリカン・ライフを描いた小島信夫の『異郷の道化師』、黒人と結婚した〈戦争花嫁〉の視点から過去の占領を語り直し、人種差別の構造に肉迫した有吉佐和子の『非色』など、フェローらの留学体験とその影響はその様相を大きく異にしている。

以上の考察を踏まえ、創作フェローシップを視座としたときに、ポスト講和期の文学空間はどのように浮かび上がるのか。文学者たちを招いてアメリカの文化を深く体験させた創作フェローシップは、アメリカによる冷戦下の文化的攻勢がポスト講和期の文学空間に奥深く入り込んでいたことを示すものである。従来、戦後の日本の文学領域へのアメリカの介入は専ら占領期の検閲を焦点として論じられてきたが、このように講和以後にもアメリカが引き続き文化の交流を通じて日本の文学者に強く働きかけたことは、戦後のアメリカをめぐる文学言説を考える上で示唆するところが大きい。GHQによる検閲が文学表現の規制を通した上から下への「指導」であったのに対して、ロ財団の交流プログラムは日本側の要望に寄り添い、できる限りフェローたちの自由を尊重しながら交流を支援することで、文学者たちにアメリカとの親密な友好関係の形成を促したことに特徴があった。即ち、ポスト占領期の日米文化交流の事例に即せば、占領から文化冷戦の時代への移行は、「禁止するアメリカ」から、自らの表象に介在し、寛大さや親密さで包摂する「アメリカ」への変容として表れるといえる。とはいえ、フェローらの作品に描かれた「アメリカ」は、多様性と両義性を孕んでいる。本論文を通して浮かび上がるのは、「アメリカ」の表象をめぐる日米間のせめぎ合いの諸相である。